

れ、秋晴れ、花ぐもり等を四季別ではなく項目別に取扱う。

3) 高校では気象学概論的に、大気圏の構造、気圧、太陽放射、気温、大気大循環、風、局地気象、大気中の水、気候変化、超高層気象を取扱い、中学との重複はさける。

4) 従って現行の中学のカリキュラムの補足を高校でやるという色彩は排除すると共に、単位数は少なくとも生物と同等の、3単位ないし4単位とする。

5) 最近アメリカで中学校用に編集された ESCP のカリキュラムは、気象の分野に関する限り、日本とアメリカという風土のちがいがもあり、そのままでは受け入れかねる。日本の場合、天気図・天気予報が毎日の新聞でかなりのスペースをしめ、国民の関心事であるし、われわれの日常生活に大災害をもたらす台風、大雨、大雪などは義務教育の教材として欠くべからざるのものである。

ウィリ・ウィリーズ

山口 協

気象に関する言葉は昔から伝えられた現象、多くの場合は、語り伝えられた現象であることが多い、気象学が体系だててくると、その現象に定義が与えられ、ある時には本来、用いられていた言葉と多少違った現象に変わっていきってしまうことすら生じている。身近な例には英語の Mist、日本語のもやなどがある。

ここにとり上げる「ウィリ・ウィリーズ」も元来はオーストラリア原住民の言葉である。

オーストラリアの大砂漠地帯には、まだ文明がおくれた、時として石器時代などとさえ言われている原住民が投げ縄でカンガルーを捕えたり、ブーメランを用いたりして生活しているが、ヨーロッパからの移住民が入植した18世紀以前は、この人々はオーストラリア全土で生活していた。

この原住民は同じ言葉を二度重ねて、意味を強める。たとえば、メルボルンを流れるヤラ河は、ヤラ・ヤラ (Yara-Yara) という土語から出ていて、その意味は「流れる」という意味で、水量豊かな河という意味をあらわしている。

ウィリ・ウィリ (Wily-Wily) もこれと同じ、意味は精神的な抑圧された状態、「憂鬱な」とか、「怖ろしい」とかといった意味の感情をあらわす土語なのである。

オーストラリアの砂漠地帯に突如として襲ってくる砂あらしは時には電光と雷鳴を伴い、雨さえ伴って原住民の平和な生活を乱す。年間の降水量が200ミリ前後の土地である。いやな気持になるのもうなずけよう。原住民

達はこの砂漠に起る砂あらしをウィリ・ウィリと呼んでいやがった。

気象学の進歩、気象観測網が整備されて、この砂あらしがアラフラ海・チモール海に発生して、西海岸から大陸に上陸してくる熱帯性低気圧によることがわかってくると、ウィリ・ウィリーズ (Wily-Wilies) と変わり、この熱帯性低気圧の呼び名にまで、拡大されるようになってしまった。イギリスのグロサリーにも、ウィリ・ウィリーズは、アラフラ海、チモール海附近に発生し、西海岸に沿って南進し、時として上陸する熱帯性低気圧といった定義をつけられ、本来の砂あらしは大分かげがうすくなってしまった。

オーストラリア大陸の東海岸地帯にも熱帯性低気圧は発生する。これはウィリ・ウィリーズとは呼ばれない。熱帯性低気圧もしくはハリケーンと呼び、ウィリ・ウィリーズとは区別されている。サンゴ海にウィリ・ウィリーズが発生するようなことが書いてあるのは間違いである。サンゴ海の熱低の発生数は年に数回であり、大分水嶺山脈が東海岸に沿って南北に走っているために内陸に入ることは皆無である。ウィリ・ウィリーズも大陸を横断して東海岸からサンゴ海にぬけることもない。

ウィリ・ウィリーズの年発生数は4回位で、初めは南西に進み、20~22° 附近で最強となり、内陸に入ってオーストラリア大湾にぬけることがある。

(このノートは筆者が滞豪中にメルボルン気象台の K. Moreley 氏に聞いた事項に基づいている。)